

『雨月物語』 攷 — 「吉備津の釜」 磯良に見る嫉妬の様相 —

雲 津 ま ゆ

はじめに

「女の嫉妬は、恋人である男にではなく、恋人を奪った女へと向けられる」

一種の定説であるが、一体誰がこのようなことを言い出したのだろうか。

この説を初めて耳にしたのは、確か小学生のころであつた。當時は、「自分は子どもだから、理解できないのだろう」と思ったものだが、二十四歳になろうとする今も、この気持ちはさっぱり理解できない。六条御息所は、なぜ葵上や夕顔を攻撃するのか。小泉八雲『奇談』の「破られた約束」に登場する死んだ元妻は、何故元夫の新妻に復讐しようとするのか。私だったら、間違いく光源氏や元夫をとり殺すだろう。

何故なら、私にとって重要なのは、自分と男との関係であつて、第二の女と男との関係は、私の与り知らぬ場所にあるからである。第二の女と私は全くの他人同士であり、彼女が私とも直接の知り合いであるなどの特別な事情がない限り、抽象的な存在にとどまる。私にとって、彼女は文字通り「第二の女」という記号的存在にすぎない。

記号とは人間関係を結べないし、記号に対して憎しみを抱くこともない。記号的存在といえども、自分に対して不快感を与える者なので、敵愾心くらいは持つかもしれないが、そのような感情は、男に対する怒りと憎しみの比ではない。相手をなぶり殺しにするに値するような激しい感情は、深い人間関係を結んだ者同士の葛藤から生じるものである。

かねてからこのように考えてきた私は、恋人の裏切りが元で鬼と化し、恋敵に凄惨な復讐を果たすという構図を持つ物語に疑問を感じてきた。勿論、記号的・抽象的存在だからこそ、何の躊躇もなく残酷な仕打ちをしてやれるのだという考え方も可能である。また、世の中には、「恋敵を何度殺してやっても飽き足らない」というほどに恋敵を憎む人間が実在するのも事実ではある。

ところで、前述した『源氏物語』や『奇談』をはじめとして、女性が恋愛に敗れた結果、鬼と化して自らの抑制された感情を解放する、という構図はあまたの物語に登場する。

上田秋成『雨月物語』卷之三「吉備津の釜」も、そのような構図を持つ物語の一つである。

「吉備津の釜」は以下の一文で始まる。

「姉婦の養ひがたきも、老いての後その功を知る」と。吝これ何人の語ぞや。

「吉備津の釜」は、姉婦論、つまり、嫉妬深い女に関する議論を展開する前文と、物語の本編である本文から構成されている。冒頭の姉婦論に関して言えば、語り手は極めて辛辣である。その姉婦に対する徹底した不寛容と激しい非難は、感情的ですらある。語り手はまず、「嫉妬深い女の良さは、年をとってからわかるようになるものだ」という意見に激しく反論し、嫉妬深い女の害悪というものは、隣近所に笑われたり、商売の邪魔になったりするくらいならばまだ無害なほうで、ひどいものは、家を滅ぼしたり一国をも滅ぼすに至るのであると説いた上で、

いにしへより此の毒にあたる人、幾許といふことをしらず。
死して蟒となり、或は霹靂を震ふて怨を報ふ類は、其の肉を醃にするとも飽べからず。

とまで言う。人間を醃、つまり塩辛にしてもまだ足りないとは、何とも過激ではないか。しかしその後、死んでまで大蛇となつて雷を降らせるようなひどい姉婦は稀であり、夫が妻をきちんと監督していれば、そのような事態には陥らないのである、と結論づけた上で、本文へ入る。本文は、大体以下のような物語である。

豪農の放蕩息子、井沢正太郎は、吉備津の神主、香央造酒の娘・磯良を娶った。この縁談は、吉備津の御釜祓いにおいて凶と出たにも関わらず、強引に進められてしまったものである。

さて、井沢へ嫁いだ磯良は、絵に描いたような貞女で、夫や夫の両親にまめまめしく仕えた。放蕩者の正太郎は、結婚当初こそおとなしくしていたが、程なく袖という遊女と馴染み、何日も家を空けるような状態が続くようになる。

そんな息子の放蕩ぶりに腹を立てた正太郎の父は、息子を座敷牢に閉じ込めてしまう。この場面では、正太郎が座敷牢に入れた際の磯良の反応が切ない。

磯良はこれを悲しがりて、朝夕の奴も殊に実に、かつ袖が方へも私に物をおくりて、信のかぎりをつくしける。

普通、夫の愛人の元に物を送ったりするだろうか。嫌がらせのために送ることさえあれ、愛人の生活を心配して援助するなど、現代では考えられまい。では、この物語が書かれた時代、もしくはこの物語の舞台に設定されている時代には、よくある行為だったのだろうか。それとも、当時においてさえ、磯良のこの行為は特別なものであったのか。この点に関しては後ほど検討することにして、物語をすすめよう。

結局、正太郎は「袖とは別れる」などと言って磯良を騙し、金品まで奪った上で袖と出奔してしまう。さすがの磯良も今度ばかりは耐え切れず、病に倒れ、遂には死んでしまう。

出奔した正太郎は、袖の従弟・彦六を頼って播磨の国にいた。しばらくは楽しく暮らしていたが、そのうち袖が体調を崩し、熱を出して苦しみ始めたと思ったら、七日目には死んでしまった。毎夕、袖の墓に通う正太郎だが、ある日、隣の新しい墓に通う若

い女と言葉を交わす。彼女は、女主人の夫が亡くなったため、病気の女主人の代りにその墓に詣でているという。「国のとなりまでも聞え玉ふ美人なる」女主人に興味を覚えた正太郎は、女に連れられて女主人の屋敷を訪ねるが、そこで待っていたのは、青ざめてやせ細った姿の磯良であった。正太郎は恐ろしさのあまりに氣を失い、氣づくとも墓地の中の三昧堂に倒れていた。

彦六の紹介で陰陽師の元を訪れた正太郎は、袖を殺したのは磯良の怨霊であり、正太郎自身の命も狙われていることを告げられる。死を免れるには、四十二日間の物忌みをする必要があるという。陰陽師に、全身に篆籀のような文字を書いてもらい、魔よけの札を家中に貼り付けて家にこもる正太郎だが、磯良の怨霊は夜な夜な訪ねてくる。磯良は、正体不明の赤い光を出したり、憎憎しげなささやき声を出したりして、正太郎を心の底から震え上がらせる。

そして、遂に、今夜さえ凌げば物忌みも明けるという四十二日目の夜がやってきた。五更の空もしらじらと明けわたった頃、正太郎は長い夢から覚めたような気持ちで、隣の部屋にいる彦六を呼ぶ。万事につけてのん気な彦六は、「無事に物忌みも明けたことだし、こちらにいらつしやいよ」と、気軽に正太郎を呼びつけ、戸を開けようとした。

彦六が戸を半分も開けないうちに、隣の部屋から、「あなや」という男の叫び声が聞こえる。正太郎の身の上に何かが起こったに違いないと考えた彦六は、斧を下げて大路に出ると、明けたと思った夜はまだ深く、冷たい夜風が吹き、月さえ出ていた。

正太郎の部屋は戸が開けっ放しになっており、正太郎の姿は見

えない。彦六はとにかく探し回るのだが、結局発見したのは、

明けたる戸脇の壁に腥々しき血灌ぎて地につたふ。されども屍も骨も見えず。月あかりに見れば、軒の端にものあり。ともし火を捧げて照らし見るに、男の髻ばかりか、りて、外には露ばかりのものなし。

というような光景であった。この後、「やはり吉備津の御釜被いは尊いもののだと語り伝えられた」と本文は結ばれる。

『吉備津の釜』の磯良は、しばしば、六条御息所をはじめとする「嫉妬に狂った女性」が、鬼と化す」という構図を持つ物語の女たちと同じ類型に属する人物として論じられる。特に、「吉備津の釜」に『源氏物語』の影響をみる説は多い。以下にいくつか例示する。

磯良が袖をとり殺した窮鬼から、夫を食殺す悪鬼に変わっていく過程には、この『源氏』の「もののけ」の構想に沿うものがある。また「もののけ」をはつきりとは姿を見せず、なかば不可知化して描いていく描法にも、『源氏物語』からの影響があったと考えていいだろう。

「破屋」で、はかなく死ぬ袖には、「夕顔」の女のイメージが重ねられていて、『吉備津の釜』の磯良の怨霊に、秋成が、中世的近世的な嫉妬の執念の姿をとらず、王朝的な「もののけ」に托ぞうとしたことは、ほぼ肯定していいのであろう。つまり、袖をとり殺したのは磯良の窮鬼（生霊）であり、の

ち、薄暗い林中の一軒屋で出会った磯良は、「鬼」(死霊)であつたのである。林中の草の家を、侍女にともなわれて、正太郎が訪ねるくだりは、文章も、『源氏物語』の「夕顔」「蓬生」の文章が、部分に採られ、ちりばめられていて、凄壮な気分を作る効果となつてゐる。

また、夕顔怪死事件については、『源氏物語』研究者の間で、御息所の生霊によるとする説と、なにがしの院に住み着いていた妖怪の仕業とする説とが対立し、いずれも決着していないようであるが、「吉備津の釜」では、袖の悶死に遭遇した正太郎が、「窮鬼きうきというものにや、古郷ふるさとに捨し人のもしやと独ひとりむね苦し」と、磯良の真心を踏みにじつたために磯良が窮鬼に化して報復したのかもしれないと煩悶するさまが描かれてゐるから、秋成は、夕顔怪死事件をみやすきおろの生霊の仕業によるものと理解して、「吉備津の釜」の構想を得るとともに、読者に、『源氏物語』をそのように読んで「吉備津の釜」の構想と対化することを要求してゐると考えられる。

「吉備津の釜」に『源氏物語』の影響が及ぼされている、という諸家の見解に反論する気はない。秋成が『雨月物語』の序で、『源氏物語』の作者である紫式部の名を出していることからしても、『源氏物語』を意識して『雨月物語』を執筆していたことは、ほぼ疑いの余地はないだろう。しかし、「吉備津の釜」の磯良と六条御息所に限つていえば、決定的な違いが一つある。

その違いとは、鬼と化した後の復讐の対象である。六条御息所の場合、憎しみの矛先は、必ず恋敵の女性へと向かう。一方、磯

良の憎しみは、徹底して夫である正太郎に注がれる。

この見解に対しては、「磯良は袖を殺しているのだから、袖に対しても当然憎しみを抱いていたはずだ」という反論が可能である。以下では、この点について検討する。

言うまでもなく、磯良の第一の復讐は、袖殺害である。それでは、その部分の本文を引用する。

しかるに袖、風のこ、ちといひしが、何となく病なやみ出でて、鬼化おのけのやうに狂はしげなれば、(中略) 看み／＼露みばかりのしるしもなく、七日にして空しくなりぬ。

たつた二行ほどの、あつさりとした描写である。描写の簡潔にすぎる点や、物語がこの復讐の後も続いていくことなどから鑑みるに、袖殺害は磯良の復讐の本懐ではないことに争ひの余地はないだろう。本懐どころか、この描写方法や、物語全体における袖の死の位置を考えるに、袖殺害は、「ついで」の感さえ漂う。袖の死は、その後には控えている正太郎に対する復讐への伏線に過ぎない。磯良にとって、袖は憎い相手には違ひないが、復讐の焦点はあくまで正太郎一人に絞られてゐるのである。

物語全体から見ても、袖の存在は軽視されている。袖は、正太郎・磯良夫婦の関係が決裂する元凶となつた、極めて重要な役割を担う登場人物であるといえる。そのような重要人物であるにも関わらず、彼女について読者に与えられる情報は、「袖」という名と、彼女が遊女であるという二点だけである。他の登場人物について読者に与えられる情報量と比較してみる。

正太郎について

- ・ 正太郎なるもの農業を厭ふあまりに、酒に乱れ色に酩酊して、父が掟を守らず。
- ・ 佳婿（正太郎）の麗なる
- ・ おのがま、の奸たる性はいかにせん。

磯良について

- ・ うまれだち秀麗にて、父母にもよく仕へ、かつ歌をよみ、箏に工みなり
- ・ 我女子（磯良）既に十七歳になりぬれば
- ・ 香央の女子磯良かしこに往てより、夙に起、おそく臥て、常に舅姑の傍を去ず、夫が性をはかりて、心を尽して仕へければ

正太郎と磯良については、簡潔であるとはいえ、その容姿や性質についての描写が存在する。上記は主役級の二人であり、この二人と、脇役と言わざるを得ない袖と比較するのは、袖にとって少々分が悪いかもしれない。しかし、同じ脇役で、袖の従弟である彦六でさえ、「彦六用意なき男なれば」という、彼の性質に関する描写がなされている。一方、袖については、その容貌や性質を推測させるような記述が一切存在しない。

袖こそまさに、「記号的な第二の女」である。袖は、人格を持たない登場人物だといっても過言ではない。もし、袖が磯良と正太郎との間の葛藤において、人格を持った一人の女性として深く介入し、復讐劇の段において重要な位置を占めるような役割を与

えられていたのだとしたら、彼女の人となりを感じさせるような表現が本文中に登場したはずである。

「吉備津の釜」は磯良と正太郎の物語であり、その確執に袖が入り込む余地はない。したがって、「吉備津の釜」の磯良は、六条御息所に代表されるような、「女が鬼になって、恋敵に復讐する」という人物類型には当てはまらないと解すべきである。

鬼と化してから取る行動が異なるのであれば、鬼へと変貌した理由も異なる可能性がある。そうだとすると、磯良と六条御息所を「嫉妬から鬼へと化した女」として同列に論じてしまうのは、乱暴に過ぎる。

これまで、磯良の鬼への変貌の原因は、「嫉妬」「女の情念」など、単純かつ大雑把な言葉でくくられてきた。しかし、私はそうは考えない。「女の嫉妬は、女へと向かう」と言われてきた中、徹底して正太郎を追い続けた磯良は注目に値する。

そのように考えるうちに、そもそも「嫉妬」とは何なのか、という疑問が生じてきた。なぜ、「女の嫉妬は女へ向かう」などと言われるのか。その根拠は何か。

本稿では、今日言う「嫉妬」が端的に現れている文献を比較検討し、「嫉妬」の定義を明らかにした上で、磯良の感情は本当にその「嫉妬」に当てはまるものなのか、という点を検証し、なぜ磯良は鬼と化すに至ったかについて論じていきたい。

一、嫉妬の真相

先行研究の多くは、磯良の変貌の原因を「嫉妬」であるという

ことを前提に議論を始めている。それは、「吉備津の釜」の語り手が冒頭において妒婦について触れているという事実に拠るところが大きい。しかし、磯良の変貌、ひいては正太郎に対する復讐の動機は、本当に「嫉妬」に起因するのだろうか。「磯良はなぜ鬼と化したか」というテーマを論じるにあたって、「嫉妬」と磯良の心の動きとの因果関係を明らかにすることを出発点としたい。

前述したように、磯良と、今日言う「嫉妬」が端的に表れている作品に登場する女性たちは、復讐の対象を全く異にする。この点に注目したのが、井上泰至氏の「吉備津の釜」―後妻打ちからの乖離―である。井上氏は、「吉備津の釜」とハーンの「破られた約束」を比較する文脈で「破られた約束」の一部を引用し、以下のような見解を示している。

「破られた約束」は、前妻の臨終に際し終生妻をめとらないと約束した男が、その約束を破って後妻を迎えたところ、前妻の亡霊が後妻の首をむしり取ってしまった、という話である。

「それはひどい話だ」とわたしは、この話をしてくれた友人にむかっていった。「この死人の復讐は―もしやるなら―男にむかつてやるべきだ」

「男はみなそう考えます」彼は答えた。「しかし、それは女の感じ方ではありません」

彼の言うとおりであった。

ここでハーンは、日本に昔からある「後妻打ち」^⑤の話に対して、その合理的なものの考え方から疑問を投げかけている。

ハーンによれば、先妻との約束を破ったのは夫なのだから、責められるべきは夫の方であるのに、何も知らない後妻が取り殺されてしまうのはあまりにもひどすぎる、という。なるほど、一見ハーンの意見は筋が通っているように思えるが、かかる合理的な解釈で女の情念をいとも簡単に割り切ってしまうって果たしてよいものだろうか。

多くの文献において、女の復讐の対象は同性の恋敵である、という点は確かに注目すべき点である。しかし、氏の指摘される「女の情念」とは一体何なのか。女性なら誰もが持っているようなものなのだろうか。女性の身に葛藤が訪れた際、その主体が「女である」というただそれだけで、その結果を「女の情念」に起因するものと断定する、その行為こそ女性を「いとも簡単に割り切ってしまった」いるのではないだろうか。井上氏はさらに続ける。

先妻の立場になって考えてみれば、彼女は夫に深い愛情を持っていたからこそ、夫に後妻を迎えないよう約束させたのである。彼女にすれば、死後もなお夫の愛を独占することが切なる願いだったのだ。こうした先妻の気持ちを考えてみれば、彼女が夫に復讐することなどありえないことはすぐに理解されよう。それよりも、新たに家に嫁いできた後妻さえ取り除いてしまえば、また夫の愛は自分だけのものになるのである。一見理にかなっているかに思われたハーンの意見も、男の目からのものに過ぎず、女の「嫉妬」というものを真に

理解したものではなかったのである。

「破られた約束」の先妻が個人的にどのように感じていたかは別として、ここで氏は「破られた約束」を例に、女性の嫉妬一般について議論しているはずである。氏の議論に対しては、以下の批判が可能である。第一に、「真」の「女の嫉妬」を定義するためには、「嫉妬」を扱う複数の文献について検討し、その共通性を抽出する等の手続きを経なければ、その根拠は不十分であると言わざるを得ない。また、その共通性が、「先妻の復讐の対象は、後妻である」という点だけでは、根拠になり得ない。復讐対象の共通性は、むしろ出発点にすぎない。

井上氏は、「破られた約束」の他に、「江戸の嫉妬」⁷⁾という文献について言及している。そのあらすじは、以下の通りである。江戸神田に吹田という商人がいた。彼は、参宮のついでに京で女を身請けし、妾宅にしのばせて逢ううち女は懷妊してしまう。それまで夫と仲の良かった本妻はこれを知って激しく嫉妬し、毎夜恐ろしい形相をして女をおどし、ついには「咽喉に喰付忽ち命を取」ってしまうというものである。

前述した井上氏の説によれば、「破られた約束」の前妻は、夫の愛を取り戻したいが一心で後妻を殺害したのである。これに対し、「江戸の嫉妬」の場合はどうであろうか。「江戸の嫉妬」の本妻は、もちろん妾が身請けされた当初から、内心面白くなかったであろうが、妾に子供ができた途端、妾を激しく憎むようになったのである。

本妻にとってみれば、妾に子供ができたということは、夫の愛

情云々の問題以前に、自分の生活そのものに関わる一大事である。妾の子供が家を継ぐことになったら、自分のその家における立場はどのように変わるのか。自分の老後はどうなるのか。場合によっては、自分の身の凋落を意味する。「江戸の嫉妬」の本妻が妾を殺害した動機は、必ずしも嫉妬のみが原因とはいえないのである。「江戸の嫉妬」本文にも、「めしつかひの者迄も、懷妊の後は、大やう妾の方のみ慕ひ、我れをば、おろそかにする体に思ひなされば」と、本妻が自分の立場の危うさに心を痛める様子が描かれている。したがって、「江戸の嫉妬」の本妻については、「夫の愛を独占したい」というような感情は問題の中心にならないはずである。「江戸の嫉妬」の本妻と「破られた約束」の前妻の共通点は、復讐対象のみであり、その復讐の論理はまったく異なると解すべきである。したがって、「江戸の嫉妬」と「破られた約束」の二つの文献についての井上氏の検討は、「女の嫉妬」とは、「夫の愛情の独占即ち後妻の否定」であるとする定義の根拠になっていない。

ところで、われわれは、どのような特徴があらわれている文献に対して、「嫉妬」を読み取るのだろうか。中江藤樹『鑑章』⁸⁾卷之三「不嫉妬毒報」に、こんな言葉がある。

客氣と云ふは、他人に心あるを防ぎ嫌うことなり

これは、嫉妬の本質をついた言葉であるといえる。心をかき乱されるような激しい嫉妬であれ、小さな焼餅であれ、或いはその不快の感情の方向性・対象などに関わらず、自分の愛する相手が「他人に心ある」状態を嫌うことが、嫉妬とよばれる感情の正体である。

ここでは、「嫉妬」を「自分が愛情を抱いている相手が、「他人に心ある」状態を嫌う心の動き」と大きく定義する。その上で、この定義にあてはまる人間関係があらわれている文献について検討し、「嫉妬」をさらに細かく分析・分類することによって、「嫉妬」の定義を確立する。

『鑑草』には、多くの嫉妬深い女性たちと、嫉妬を全くしない女性たちの逸話が登場する。前者はその「妬毒」によって恐ろしい報いを受けることになり、後者はその功德を褒め称えられる構成となっている。『鑑草』はこの女性たちの逸話を教訓とし、読者に「不嫉」をすすめる書である。

『鑑草』に登場する妬婦たちの逸話は、かなり過激である。いくつか紹介しよう。

まず、縉雲の妻の朱子。この人は、夫が、自分が嫁に来た時に一緒に連れてきた美人の侍女に手を出すのではないかという疑念に凝り固まっていた。彼女はこの侍女を常に疑いの眼で見つめ、理由もなく鞭打ったりしていた。月日が流れ、あるときこの侍女が妊娠の兆しを見せたので、朱子は、「やっばり。私が疑っていた通りだった」と、この女を杖で撃ち殺し、その死体をずたずたに切り刻み、厠に捨ててしまう。結局、朱子はこの残酷な仕打ちの報いで、侍女の怨霊に惨殺されてしまうことになる。

次に、杜昌の妻・柳氏の話。柳氏は大変嫉妬深い女で、侍女が杜昌と二人きりで、杜昌の髪をとかしたというだけで、侍女の手の指を一本一本切り落としてしまった。またある時は、夫が別の侍女の美しい声をめめて、歌を歌わせていたのが面白くないといって、その侍女の舌を抜き取ってしまった。柳氏もやはり、自身も

指や舌を失うという報いを受ける。

最後に、さる商人の妻の話。この商人の妻は、夫と関係した女を監禁し、飢え死にさせようとするが失敗。そこで、自ら女の首に手をかけ、絞殺しようと試みる。この妻も、女が受けた肉体的損傷をそのまま報いとして受け、女の怨霊に殺される。

『鑑草』に登場する妬婦は、極悪非道な女たちばかりで、このような妬婦たちを見ていると、「吉備津の釜」の語り手の、「其肉を鹽にするも飽くべからず」という言葉にも共感してしまいそうである。しかし、「嫉妬」と、憎悪や残酷な復讐などの凄惨な結果は、常に結びついているというわけではない。憎しみや復讐なしでも、嫉妬という感情は存在し得る。次は、憎しみや復讐を伴わない嫉妬の例である。

多くの女訓書に禁忌として登場する「嫉妬」であるが、『乳母の草子』^⑨では、「御もの嫉みの優しく見えて候」として、『源氏物語』から「優しい」嫉妬の例を挙げている。

この宮（女三の宮）わたり給ひて三日の夜、紫の上ならばぬ御一人寝の数そふも、流石心細く、行く末は斯くのみこそあらめと思し続けて、終夜泣き給へるに、御単衣の袖いたく濡れたるを源氏曉帰りおはして御袖を引き遣りて添ひ臥し給へるに、御単衣の袖を引き隠し給ひしが源氏あかず哀れに、らうたく思し召して、御心ざしいとどまさりぬ。

紫の上のいじらしい振る舞いに共感をこめた語り手は、「人は斯うこそあるべけれ、ただ恐ろしく云ひ腹立つ事用なし」と結ん

でいる。

それでは、「嫉妬」の権化のように語られ、「吉備津の釜」を含む多くの文学作品に影響を与えた六条御息所の「嫉妬」はどうだろう。ここでは、妊娠中の葵上のごころに、六条御息所がものけとなつて訪れる場面を例にとつて考える。

身ひとつのうき嘆きよりほかに人をあしかれなど思ふ心もなけれど、もの思ひにあくがるなる魂は、さもやあらむと思じ知らるることもあり。(中略)すこしうちまどろみたまふ夢には、かの姫君と思しき人のいときよらにてある所に行きて、とかくひきまさぐり、現にも似ず、猛くいかきひたぶる心出で来て、うちかなぐるなど見えたまふこと度重なりにつけり。

この場面において、六条御息所は、葵上を憎いと思う心を自分では意識しないことによつて、葵上への憎しみはさらに倍増され、実際に危害を加えてしまう。葵上の存在如何にかかわらず、源氏の心は六条御息所から離れ始めていたが、葵上の妊娠は、源氏に六条御息所を避ける理由を与えてしまった。いよいよ源氏との仲が危なくなつた御息所は、その不安と憎しみ、葵上から車争いの日に受けた屈辱、今や源氏の子を身ごもっていることに對する羨望などが一気に爆発し、生霊と化すに至つたのである。

『源氏物語』からは、最後にもう一人、夕霧の妻・雲居雁を挙げたい。

親友・柏木の死によつて、夕霧は柏木の未亡人・落葉宮の世話焼くようになった。そのうちに、夕霧は落葉宮に恋愛感情を抱

くようになり、強引に妻に迎える。これに對して怒つたのが、正妻でありこれまでは唯一の妻であつた雲居雁である。雲居雁は、夕霧の行動に怒り、実家へ歸つてしまう。

(実家へ迎えに來た夕霧に對する、雲居雁のせりふ)「何ごとも、今はと見飽きたまひにける身なれば、今、はた、なほるべきにもあらぬを、何かはとて。あやしき人々は、思し棄てずはうれしうこそはあらめ」と聞こえたまへり。

この場面の雲居雁は、「あなたは私に飽きてしまつたのでしょう。じゃ無理して一緒に暮らさなくてもいいわよ。見苦しい子どもたちのことは、あなたがお見捨てにならないのなら、うれいですよ。」というような挑戦的な様子である。ここで、雲居雁は、「自分の愛する人が、自分以外のものに「心ある」状態」を嫌っている。しかし、六条御息所の場合とは異なり、雲居雁の怒りの対象は、徹底して夫の夕霧である。その点に關しては、落葉宮が夕霧との結婚に乗り氣でないことが、影響しているのかもしれない。

以上、大きな意味での「嫉妬」が表現されている文献を挙げたが、それでは、この「嫉妬」に共通する要素は何なのであろうか。それは、主人公(ここに例示した登場人物たちは、作中では脇役である場合もあるが、ここでは「嫉妬」の主体として、「主人公」とよぶ)が、「愛する人」の心が「他にある」ことを「嫌」だと感じた、その不快の感情が何らかの方法で、表現されているという点である。

当然のことながら、『鑑草』の嫉妬たちの嫉妬と、紫の上の嫉妬は、読者に大きく異なる印象を与える。それは、不快の感情の表現方法が異なるからである。また、どのような人間関係の構造が、「嫉妬」を起こす原因であるかとみなされているのか、その点を明らかにするためには、主人公と「愛する人」との関係のありように注目することが必要不可欠である。したがって、「不快の感情の表現方法」、言い換えれば、不快の感情の方向性・対象と、主人公と「愛する人」の関係のありようは、嫉妬の定義を考える上で、重要な要素であるといえる。

主人公と「愛する人」の関係のありようは、以下の三つに分けられる。(例示した文献における主人公の「愛する人」は、いずれも恋愛関係にある、または過去にそうであった男性であるから、以下では「男性」と呼ぶ)

- ① 主人公と男性の関係は安定しており、第三者によってその関係が害される恐れはほとんどないが、主人公は男性が自分以外の誰かに少しでも関心を持つことすら許せない。
- ② 主人公と男性の関係は、第三者によって破壊されるまでには至らないが、第三者の出現により、かなりの影響を受ける。

- ③ 第三者の出現により、主人公と男性の関係は完全に破壊される。

この三つの分類に基づいて、例示の文献を分けると、①の類型に属するのが、『鑑草』の柳氏の逸話である。侍女の存在が、夫と柳氏との関係に悪影響を及ぼす可能性はほとんどゼロに近いというのに、柳氏は侍女を徹底的に痛めつける。しかし、柳氏にとつ

ては、夫の心がほんの少しでも、それがとうてい恋愛に結びつかないような「興味」というレベルであってさえ、他人にあるということ自体が許せないのである。

例示した文献の中においては、②に属するものが多い。『鑑草』の朱子(彼女の場合は、侍女が実際に妊娠していたかどうかは甚だ怪しい。すべては朱子の被害妄想であるという可能性もかなり高く、したがって、侍女の存在は、現実には朱子と夫の関係に何の影響も及ぼしていなかったかもしれない。しかし、朱子の主観で見た彼女自身と夫の関係は、この侍女によって大きく害されていたのだから、ここでは②として分類する)、商人の妻、『江戸の嫉妬』の本妻、紫の上、六条御息所、雲居雁は、皆一様に、男性との間に一種の危機を迎えている。

②の「かなりの影響」という表現は曖昧であるが、ここでは、第三者の存在によって、主人公と男性の関係に何らかの変化が生じる場合を言う。『江戸の嫉妬』の本妻は、吹田屋の妻の座は維持できていたが、妾によって夫の歡心は大いに奪われた。紫の上は、女三の宮降嫁後も、光源氏の最愛の妻であるという事実に変わりはなかったが、正妻の座は奪われ、ひとり寝の不安と戦わなくてはならなかった。六条御息所と光源氏の関係は、はじめから壊れかけていたかもしれないが、他の女たちと比較することによって、光源氏はますます六条を疎ましく思うようになっていった。

③に属するのは『破られた約束』である。この物語においては、前妻と夫の関係は、前妻の死によって、終焉を迎えたかに見える。実際、前妻の死後も生者として日々を重ね続けた夫にとっては、前妻との関係は過去のものであったのだらう。だからこそ、前妻

との約束を破って後妻を迎えることができたのである。しかし、死者である前妻にとっては、夫との関係は生き続けていた。新しい妻が来るまでは、自分が息を引き取ったその日と全く変わらぬ関係が、夫との間に存在していたのである。したがって、前妻にとっては、夫と自分の関係を破壊したのは、後妻であった。

主人公と「愛する人」との関係のありようはまた、物語全体を読み取るにあたっても無視できない要素である。

次に、不快感の方向性と対象という点について検討する。不快感の感情に対する主人公の反応は、大体以下の類型に分けることが可能である。

Ⅰ 男性が「心に向けた」対象への怒り・憎しみ

Ⅱ 自分を愛さなくなった、もしくは他の対象へ目を向けた男性への怒り・憎しみ

Ⅲ 誰かを責めることはなく、状態を悲しむ

Ⅳ 「愛されない自分」への嫌悪

繰り返して述べているように、「嫉妬」があらわれている文献において、主人公の不快感の方向性と対象は、Ⅰの形で表現されることが圧倒的に多い。『鑑草』に妬婦たちは全員この類型に属し、『江戸の嫉妬』、『破られた約束』、六条御息所もまた然りである。例示した文献の中では、『源氏物語』の雲居雁がⅡ、紫の上がⅢの反応を見せる。

以上のことから、「嫉妬」とは、「自分の愛する人が、他人に心を与えることを嫌う心の動きである。また、その心の動きには、必ず不快の感情の表現が伴うものである」と定義したい。また、既に見たとおり、不快の表現の対象が誰であるかについては、嫉

妬の本質とは関係がない。したがって、井上氏の言う「嫉妬の本質」^⑩は誤りであると言わざるを得ない。

それでは、「嫉妬」の定義を確立した上で、本題である「吉備津の釜」の磯良が、この定義に当てはまる行動をとっているかどうか、また、「吉備津の釜」における磯良と正太郎の関係のありようはどのような状態であったかについて検討する。

まずは、二人の関係について。物語の前半、正太郎が袖を身請けして家に帰らなくなった時点では、磯良と正太郎の関係は、②の状態であったといえる。正太郎の心は袖に大きく傾いていて、そのことは磯良との関係に大きな影を落としていたが、磯良は依然として正太郎の妻であったし、座敷牢に閉じ込められた正太郎が、磯良に対して「かの女をも古郷に送りて」と袖との別れを示唆し、それに対して磯良が喜んだことから、この時点では正太郎・磯良夫婦の関係の修復はまだ可能であり、完全には破壊されていなかったといえることができる。

正太郎の出兵によって、正太郎と磯良の関係は完全に破壊される。つまり、正太郎の出兵を契機に、二人の関係は②の状態から③の状態へと移行する。物語の最後、つまり、磯良の怨霊が正太郎を殺害するまで、この関係は変わらない。「吉備津の釜」では、磯良と正太郎の関係が、②の類型から③の類型へ移行する様が描かれているといえる。したがって、「嫉妬」が起りやすい人間関係の基盤自体は、「吉備津の釜」の構成上、確かに存在していたといえる。

次に、磯良の感情の動きについて検討する。まず、本文中で、磯良の感情を読み取れる箇所を挙げる。

《磯良の感情について直接的に描写している箇所》

・磯良これ（正太郎が袖を身請けして、その別宅から帰ってこないこと）を怨みて

・磯良これ（正太郎の父が息子を座敷牢に閉じ込めてしまったこと）を悲しがりて

・（正太郎が、袖と別れるためにお金を工面してくれと願ひ出たことに對して）磯良いとも喜しく

・かくまでたばかられしかば、今はひたすらにうらみ歎きて

・我児（磯良）も日をかぞへて（婚礼を）待わぶる物を

・香央の女子磯良かしこに往てより、夙に起、おそく臥して、常に舅姑の傍を去ず、夫が性をはかりて、心を尽して仕へければ

・磯良これを怨て、或は舅姑の怒りに託て諫め、或日は徒なる心をうらみかこてども

・磯良これを悲しがりて、朝夕の奴も殊に実やかに、かつ袖が方へも私に物を飼りて、信のかぎりをつくしける

・磯良いとも喜しく、此事安くおぼし玉へとて、私におのが衣服調度を金にかへ、猶香央の母が許へも偽りて金を乞、正太郎に与へける

・かくまでたばかられしかば、今はひたすらにうらみ歎きて、遂に重き病に臥にけり

・粥さへ日々にすたりて、よろづにたのみなくぞ見えにけり
・顔の色いと青ざめて、たゆき眼すまじく、我を指たる手の青くほそりたる恐ろしさに

・さきに女の命をうばひ、怨み猶尽きず

・其夜三更の比おそろしきこゑして、あなにくや、こゝにたふとき符文を設つるよとつぶやきて復び声なし

・下屋の窓の紙にさと赤き光さして

・かの鬼（磯良）も夜ごとに家を繞り、或は屋の棟に叫びて、怒れる声夜ましにすまじ

《磯良の言葉が直接語られている箇所》

・此事安くおぼし玉へ

・めづらしくもあひ見奉るものかな。つらき報ひの程しらせ

まゐらせん

・あなにくや、こゝにたふとき符文を設けつるよ

・あな悪や、こゝにも貼つるよ

次に、以上の本文中の表現に基づき、時間軸に沿った形で、磯良の心の動きを分析する。

まず、井沢家に嫁いだ当初の磯良についてであるが、彼女はこの結婚を楽しみにしており、嫁いでも理想の嫁として行動した。舅や姑に気に入られ、夫とも「むつまじくかたら」っていた磯良は、まずまず順調な結婚生活をスタートしたといえるだろう。

事態が狂い始めたのは、正太郎が袖という遊女と馴染み始めてからである。袖を囲った別宅に入り浸り、磯良の待つ自宅へ帰らなくなった正太郎に對し、語り手は磯良の感情を「これを怨みて」と表現している。すなわち、磯良はこの場面において確かに、「自分の愛する人が、他人に心ある状態」を嫌う反応を示している。磯良の不快感には、「舅姑の怒りに託て諫め、或日は徒なる心をうらみかこ」つ、という形で表現されている。これは、非常に

感情を抑えた、穏やかな表現ではあるが、Ⅱの「自分を愛さなくなった、もしくは他の対象へ目を向けた男性への怒り・憎しみ」に属す表現方法である。この時点での磯良は、少なくとも表面上は、正太郎に対して「怒り・憎しみ」というような激しい感情を抱いているようには見えない。座敷牢に閉じ込められた正太郎に対して「朝夕の奴も殊に実やかに」仕えているという点から、磯良は怒ったり憎んだりはしていないのだという推論が成り立つ。しかし、正太郎が、袖に入れ込んでいることに對し、「怨」んでいること、具体的な行動が、正太郎に對する働きかけであったという二点から、この場面で磯良は、②―Ⅱに属す嫉妬の様相を見せているといえる。

壊れかけている磯良と正太郎の関係だが、「袖を里に送り帰したいから、お金を工面してほしい」と頼む正太郎に對し、「いとも喜しく」「此事安くおほし玉へ」と応じる場面における磯良の心情は、どのように理解できるだろうか。正太郎の頼みというのは、現代風に言えば、「愛人と別れたいから、手切れ金を用意してくれ」とでもいった風情だろうか。時代背景の違いを考慮したとしても、かなり図々しい要求である。しかし、磯良は、まったく不快の反応を見せないどころか、「いとも喜しく」正太郎の要求に應じ、「私におのが衣服調度を金にかへ、猶香央の母が許へも偽りて金を乞ひ、正太郎に与へ」てしまうのである。

この場面からは、磯良が「不嫉」の妻であることが伝わってくる。なるほど磯良は嫉妬してはいる。しかし、その嫉妬は根の浅いものに留まっていたといえるだろう。本当に嫉妬深い妻ならば、その不快の感情は激しく、したがって、正太郎が袖と別れると言っ

たくらいで「いとも喜しく」なってしまうたり、自分の衣服調度を金に換え、袖に恵んでしまふとは考えにくいからである。

また、正太郎の甘言に「いとも喜しく」応じる、という磯良の行動の背景には、磯良がただひたすらに正太郎と自分の良好な関係を渴望していたことが伺える。舅が、正太郎を座敷牢に閉じ込めたことを「悲しがる」様子には、嫉妬心よりも、自分と夫の不和を歎く心があらわれている。

正太郎の出走までを物語の前半とするならば、物語前半における磯良の心情は、正太郎の浮氣に對し、②―Ⅱの類型に属す根の浅い嫉妬をしていたが、そのような嫉妬心以上に強く感じていたのは、自分と夫との関係がうまくいかないことに對する悲しみであった、とまとめられる。

それでは、磯良の負の感情が爆発し、袖や正太郎に死をもたらすまでに至る物語後半において、磯良の心情はどのように表現されているだろうか。ひどい目に遭いながら、決して感情的にならなかった磯良が、正太郎出走後は一変して、「かくまでたばかられしかば、今はひたすらにうらみ歎きて遂に重き病に臥しにけり」という反応を見せる。

重い病の原因になるほどの「うらみ歎き」は、相当激しく強い「うらみ歎き」であるといえるだろう。先ほど述べたとおり、この時点において、磯良と正太郎の関係は②の状態から、③の状態に移行した。それでは、この場面における磯良の「うらみ歎き」（Ⅱ「不快感」）は、何によって引き起こされ、誰にぶつけられているだろうか。その答えは、本文に明記されている。磯良の「うらみ歎き」は、正太郎にひどく騙されたことによって生じ、その

恨みをぶつける対象は、磯良を騙した張本人である正太郎である。したがって、この場面における磯良の不快感とは、「愛する人の心が他人にあることを嫌う心の動き」に起因するものではなく、ひどく騙されることによって生じた深い心の傷に起因するものである。この場面における磯良の「うらみ歎き」は、嫉妬心とは無関係なものであるといえる。

次に磯良が登場するのは、袖を失ったばかりの正太郎が、「国のとなりまでも聞え玉ふ美人」の女君に興味を抱き、その住まいを訪れる場面である。正太郎を待っていたのは磯良の死霊であった。磯良は、正太郎に対し、「めづらしくもあひ見奉るものかな。つらき報ひの程しらせまゐらせん」と宣言する。「顔の色いと青ざめて、たゆき眼すざまじく、我を指たる手の青くほそりたる」磯良には、もはや理想的な妻であった頃の面影はない。

この後、陰陽師によって、袖の死は磯良によってもたらされたもので、このままでは正太郎の命も危ないという事実が明らかにされる。

袖をとり殺し、変わり果てた姿で正太郎の前に現れた際の磯良の心情は、いかなるものだったのだろうか。ここでは、磯良自身の言葉を中心に考えたい。磯良の、「つらき報ひの程しらせまゐらせん」という言葉は、「ひどい仕打ちに対する仕返しがどんなものであるか、思いしらせてあげましよう」^①、「むごい仕打ちに対する報い思い知らせよう」^②、「報いのつらさ悲しさがどれほどのものであるか知っていただきたい」^③等と訳される。つまり、ここで磯良は、正太郎に対し、正太郎の仕打ちがいかにひどいものであり、それがどれだけ自分を傷つけたかということを、復讐を通

じて思い知らせてやろう、と宣言しているわけである。この場面においても、磯良の怒りの対象は徹底して正太郎である。また、この怒りの原因は、正太郎の「つらき」仕打ちであり、その仕打ちの中には、自分以外の女に心を傾けたことも含まれているかもしれないが、それは「つらき」仕打ちのほんの一部に過ぎない。この場面においても、磯良の不快の感情は、嫉妬心に起因しているものではないということができよう。

さて、いよいよ復讐の時がやって来た。磯良は、赤い光を発したり、「あなにくや」とつぶやいたり、憤怒をこめた叫び声をあげたり、逆に沈黙したり、さまざま方法で正太郎を震え上がらせる。磯良は、最終的には正太郎を惨殺してしまう。

注目すべきは、磯良は、正太郎が出奔した辺りから、だんだんと感情的になり、最後の場面では、その感情の昂ぶりは頂点に達しているという点である。物語後半、つまり、「かくもたばかられ」正太郎との関係が完全に破壊されてから、磯良は自分の感情をおさえられなくなってしまうのだ。一方で、多少なりとも「嫉妬」を感じていた物語の前半において、磯良はその感情を誰かにぶつけたり、嫉妬心を怒りや憎しみといった攻撃的な感情に転化させることはなかった。したがって、磯良を激しく怒らせ、鬼へと変貌させた感情は、「嫉妬」だけでは有り得ない。

二、磯良を復讐へと向かわせたもの

ところで、磯良の復讐の原因を「嫉妬」であるとする説は、磯良の行動・心情のどのような点を、「嫉妬」の前提としたのだら

うか。そのような論文の多くは、磯良の復讐の動機が「嫉妬」であることは、当然の前提として議論が展開されている¹⁴。

磯良の物語後半部分にあらわれる怒りが「嫉妬」に起因するものであると誤認される原因は、第一に、語り手が冒頭において妬婦について語ること、第二に、「吉備津の釜」の人間関係の設定にあると思われる。既に見たように、磯良―正太郎―袖の関係は、「嫉妬」が端的にあらわれている文献と同様の様相を呈している。すなわち、「妻と夫および愛人という三者関係」および「愛人によって、夫婦の関係は破壊された」という設定である。また、磯良は物語前半において実際に軽い嫉妬心を持っており、それが後半の怒りと混同されてしまっているのだろう。「嫉妬」が原因で過激な行動をとる人物は枚挙に暇がないので、磯良もその一人と見なされてしまっているのである。しかし、よく分析してみれば、磯良の復讐は、嫉妬に起因するものでないことは、既に見たとおりである。

それでは、肝心の、磯良を復讐に駆り立てた「嫉妬とは異なる感情」とは何であったのだろうか。

磯良・正太郎夫婦の蜜月は、磯良が井沢家に嫁ぎ、その良妻ぶりに「正太郎も其志に愛てむつまじくかたらひけり」という一文に始まり、終わる。ここから先の二人は、ひたすら確執を深めるのみなのである。

さて、冒頭でも引用した「朝夕の奴も殊に実に、かつ袖が方へも私に物を飼りて、信のかぎりを尽くしける」という部分だが、磯良のこのような行為は、「吉備津の釜」が書かれた当時においては、一般的なものであったのだろうか。当時において、磯

良の行為はどのように評価されたのか、という点は、この場面における磯良の心情を検討する上で必要不可欠な要素である。

磯良の行動について、鵜月洋氏は、「当時においては、一夫一婦制が確立していたわけではなく、妻と妾をもつことは一般の風習であり、その場合は、妻は妾に対して、いたわりの気持ちを見せるのが妻としてのたしなみであり、美徳であると考えられていた。磯良も、それを遵奉したのである¹⁵」としている。また、中江藤樹『鑑草』には、「妻が、夫が赴任先で新しく作った妻に対して」刺さへ衛の国にて設けたる妻の方へ、音物あつく送りて嫉める心は露もなかりけり」とある。

この妻は、『鑑草』の中では、「女の手本」と評価されている女性である。「妻が、夫の女に物を送る」という具体例が、美徳として表現されていることから、磯良の行為は、当時においては高く評価される行為であったと解釈すべきである。

しかし、高く評価されることと、一般的であることは必ずしも両立しない。上記『鑑草』においても、「女の手本」たる妻の献身を見かねた兄嫁が、「鮑蘇（夫）既に別の妻を設けぬる上は御身あつて甲斐なき事なり、急き此の家を去り給ふべし」と離婚を勧める場面がある。つまり、一方では、夫に新しい女ができ、たとえ妻がないがしろにされたとしても、その新しい女にいたわりの気持ちを見せるのが美徳であるという価値観がありながら、もう一方では、そのようにならないがしろにされた妻は、怒って家を出て行ってしまういたくなる気持ちもまた理であるという価値観も確かに存在していたということだ。そもそも、仮に、妻が夫の新しい女に寛大な態度で接することが一般的であったなら、女訓書に

いちいちこのような教訓話を掲載する必要はないのである。以上のことから、磯良の袖に対する態度と、その行動をささえた価値観は、次のように解釈すべきである。当時において、妻が夫の新しい女に寛大な態度で接することは、理想とされていた。しかし、多くの妻たちにとって、この理想を実現することは困難であった。したがって、磯良は文字通り「理想的な妻」であつたわけである。

磯良は、その理想的な行いを実行してみせた。その動機は、嫉妬心を見せることによって正太郎の愛を失うことを恐れたからかもしれないし、単に「理想的」といわれる女性像を信奉し、そのような女性であることを自身に課していたからかもしれない。或いは、その両方かもしれない。『鑑草』にも、「夫の他人に心を通はず時に、愠気の毒心なく、不嫉の本心明らかなれば、必ず其の夫妻の賢徳を感じ己が非を悔いて、淫乱を廃るものなり。業平の淫乱なるも、その妻の不嫉に感動して河内通ひを罷られけるとなん、これ不嫉の得その一なり」とあり、妻が嫉妬さえしなければ、夫は戻ってくるものなのだと言われている。いずれにせよ、完璧に美徳を実行する磯良は、そのような既成の価値観に対して、非常に素直に反応していた女性であるということが言えるであろう。

さて、座敷牢に閉じ込められた正太郎は、一計を案ずる。言葉巧みに、磯良から金品を騙し取るのである。この甘言に対し、磯良は内心何を思っただろうか。「いとも喜しく」正太郎に応じる磯良に、疑念の影は読み取れない。ここは、磯良が、「妻が嫉妬しなければ、夫は戻ってくるものなのだ」という既成の価値観を信奉しきつていったということが如実にあらわれているシーンである。磯良は、自分の献身が功を奏し、正太郎が戻ってきたものと

勘違いしたのである。この場面における磯良の、「いとも喜しい気持ち」は、正太郎が自分の元へ戻ってきたという喜びに留まらない。今までの「理想的な妻」としての努力が報われた喜び、また、自分の「理想的な」振る舞いが正しいと証明されたことに対する喜びである。

しかし、この喜びは、正太郎の出走によって、完全に否定されることとなる。「かくまでたばかられしかば」という表現には、磯良の、正太郎にひどく騙されたということに対する恨みの他に、自分の信じてきた行いに対する答えは、こんなものだったのかという歎きがこめられている。磯良は、正太郎の心を取り戻すために、「理想的な妻」であり続けた。また、彼女自身が「理想的な妻」であることを良しとし、それこそが正しい道であると信じてきた。だから、正太郎が袖を身請けし、家に帰らなくなった際には、「怨み」を感じていたが、「怨み」を抑えて感じよく振舞った。袖にものを送ってやり、正太郎にも金品を渡した。しかし、それら全ては無意味な行為であった。「理想的な妻」であつたことの結果がこのような悲惨なものであるなら、「理想の妻」であり続ける意味などまったくない。

磯良が病に伏したのは、夫にひどく騙されたことのみが原因ではない。自分が正しいと信じ、選んできた道を否定されてしまったからである。

当時の社会通念上、理想とされた女性像に反することなく控えて従順であつた磯良だが、自分自身の生き方に対する自信の大きさは、(本人がそれと意識していたか否かに関わらず)相当のものであつたと思われる。自信家の磯良に、「自分は、本当は我

慢しているのではないだろうか。自分は、袖に心から贈り物をしていたのではなく、正太郎の愛を失うことが怖くてこんなことをしているのではないだろうか」という観点はなかった。自分の優等生的ではない側面については見えないふり、気づかないふりをして生きてきたということだ。磯良は進んで夫に献身しており、それは彼女が心から望んでいる行いであるはずなのだから、そのような疑念の入り込む余地はないのである。磯良は、正太郎に騙され、自分の行動のすべては無駄だったということが明らかに becoming 初めて、自分自身の隠された心の動きに気づくことになったのだ。

磯良が死霊と化して後、正太郎と再会する場面の、「つらき報ひの程知らせまらせん」という言葉は、彼女の変化をよくあらわしている。本文中における生前の磯良は、自分の感情や考えを、はっきりと他人に主張するような女性ではなかった。それが、この場面においては、「報いをうけさせてやりたい」という自分の気持ちと、「実際につらい報いをうけさせてやりますよ」というこれからの自分の行動を、はっきりと正太郎に伝えている。また、この場面以降の磯良、つまり死後の磯良は、感情をストレートに表現する存在として描かれている。そのストレートな感情表現の最たるものが、正太郎惨殺だが、夜な夜な正太郎を訪れた際も「あなにくや」という、ほとんど罵りに近いような言葉の使い方をし、「たふとき符文」がいたるところに貼ってあることに対して怒りの叫び声を上げる行為も、かなり直情的といえるだろう。生前の磯良と、死後の磯良の大きな相違については、先行研究でもしばしば指摘される点である。また、この変化は、磯良の心の動きを検討するにあたって、注目すべき点である。死を境に、磯

良の心にはどのような動きが生じたのだろうか。

夫の出奔と、自らの死を境に、磯良は「理想の妻」として生きる必要はなくなった。その時、彼女は、自分がこれまで実践してきた数々の「理想の妻」としての行いについて振り返ったに違いない。磯良は、本心では正太郎の浮気を「怨」んでいたが、ついにその「怨み」を激しい感情に転化してぶつけようとはしなかった。これは、磯良が「理想の妻であること」を信奉していたことに起因する。どうせ失うのであれば、「怨」みを表現すればよかった。終始心を痛めていたことを、夫に伝えれば良かった。このような気持ちだが、死後の磯良の直情にあらわれているのではないか。磯良の「うらみ歎き」の本質は、「理想の妻」として振舞っていたころからずっと感じていながら、磯良自身によって抑圧されてきた負の感情であったと解すべきである。

磯良は、正太郎の出奔以後、「理想の妻であること」を信奉しなくなったのだ。信条を改めた磯良は、その感情の赴くままに袖を殺し、正太郎に対しては、自分が正太郎との関係によって受けた分だけの苦しみと悲しみに相当する復讐を遂行したのである。

鶴月洋氏は、「この変貌がはげしければはげしいほど、それを裏返せば、磯良をがんじがらめにしていた儒教道德の圧力がそれだけ強かったこと、そのゆがみがそれだけ大きかったことを物語っている」と述べられている。変貌の激しさが、磯良の抑圧の激しさに比例しているという点については、鶴月氏に賛成する。しかし、それが儒教道德の圧力の結果であるか否かという点は、特に注目すべき点ではない。磯良の生きた時代に、磯良をがんじがらめにしていたのは、確かに儒教道德の圧力であったかもしれない。

しかし、磯良の抑圧と解放の構図は、いつの時代にも起こり得る普遍的なモデルである。死して壮絶な復讐を遂行する魔性に変貌するまでに磯良を追い込んだのは、彼女自身である。夫を取り戻すために、自分自身が満足できる自分であるために、磯良は儒教道徳的な「理想の妻」であることを選んだ。どんな時代のどんな人間も、それぞれの時代の制約を受けて生きている。磯良にとって、それがたまたま儒教道徳であっただけである。磯良の抑圧と解放は、いつの時代の、どのような人間にも起こり得ることである。

秋成の観点や、時代の観点をほとんど無視して議論を展開してきたが、それは、私が「吉備津の釜」を普遍的な抑圧と解放の物語として読んだからである。また、本文を詳細に検討することによって、そのような読みが客観的に可能であると考えたからである。その点を、補足として付け加えておく。

【注】

- (1) 江戸時代には、釜鳴、釜占、御釜払いとして名高く、諸書に記録されている。本文には、「数の祓物を供へて御湯を奉り、吉祥凶祥を占ふ。巫子祝詞をはり、湯の沸き上がるにおよびて、吉祥には釜の鳴音牛のほゆるが如し」とある。
- (2) 中村博保『雨月物語評釈』四五五頁
- (3) 高田衛『上田秋成研究序説』二五六頁
- (4) 勝倉壽一『雨月物語構想論』二五〇頁
- (5) 井上泰至「吉備津の釜」―後妻打ちからの乖離―に「かかる合理的な解釈で女の情念をいとも簡単に割り切ってしまう

てよいのだろうか」とある。

- (6) 山東京伝『骨董集』に「うはなり打ともいひけるよし、妻を離別して後の妻をむかふるに、其しかたによりて、前の妻したしき女どもをたのみ、相当打を催し、まづ前に後の妻の方へ使ひをつかはして、某の日某の時打にゆくべきよしをいひやり、其の日にいたれば、前妻をはじめとして、したがつ女ども、おのおのしなひやうのものをもちて、後の妻の方へゆき、台所より入て打まはる」とある。

- (7) 都の錦『当世智恵鑑』巻之四第一「江戸の嫉婦」

- (8) 六巻。教訓。藤樹三十六、七才頃の著作で、正保四、風月宗知刊。

- (9) 一冊。御伽草子。室町時代に成立。左大臣まさ平の二人の娘は、腹黒く教養のない乳母と、氣立て優れて教養豊かな乳母に育まれて対照的人柄に育った。左大臣は管弦のあそびで姉君の無骨を怒り、姉君の乳母を放逐して別の人を添える。妹君の乳母が里から心尽くした教養の文を贈ると、追われた姉君の乳母も劣らじと滑稽な処世訓を贈った。

- (10) 「夫の愛情の独占即ち後妻の否定」のこと。

- (11) 鵜月洋『雨月物語評釈』

- (12) 長島弘明『雨月物語の世界』

- (13) 青木正次『雨月物語（上）全訳注』

- (14) たとえば、中村博保『上田秋成の研究』一五一頁「何かこの小説の構想に暗示を与えている説話的なモチーフ（つまり嫉妬・変貌・報復のモチーフ）を含んだ基本的な典拠がどこかに考えられなければならないはずである。勝倉壽一『雨月

物語構想論』二四六頁「本編の構想の中核が、夫の浮気に嫉妬し、苦悩し、ついには復讐鬼に変貌して凄惨な報復をせずにはやまない」等

(15) 前出『雨月物語評釈』

(16) 「秋成の思想と文学」(『日本古典鑑賞講座』角川書店)

【付記】

本論文は二〇〇七年一月に千葉大学文学部に提出した卒論に基づくものである。

(くもつ・まゆ 二〇〇七年千葉大学文学部日本文化学科卒業)